

## 保育者向け双方向型オンライン研修の実践報告と課題 —新型コロナウイルス感染拡大防止として ICT 活用の方策—

亀山 秀郎 佐竹 智恵子 志方 智恵子

(認定こども園七松幼稚園)

新型コロナウイルス感染拡大により、感染予防に配慮した保育実践と、職員の学びの確保が問題となっている。幼児教育施設における業務の ICT 化が進む中、三密を避けた園内、園外に及ぶ研修の有り方の見直しが急務である。本研究では、Zoom を活用した保育者向け双方向型オンライン研修会を実施し、Google フォームによる事後アンケートを元に、その実践の有効性と課題について報告することを目的とする。また、本実践は 3 回行い、このうち 3 回目は Zoom を起動させながら Google アプリの Google Jamboard というホワイトボード上の画面に、付箋や写真を張り付けるアプリを用いたグループワークを行った。今回のアンケートにより、対面と同様の学びや様々な地域からの参加者と繋がる事が出来るという有効性が認められた。一方で、操作の難しさや、オンラインの経験値などの課題が見出された。今後、研修がスムーズに行われるように、WiFi 環境の整備や操作方法、運営側の事前準備など改善が必要と言える。

キーワード：ICT テレビ会議システム 双方向型オンライン研修 コロナ禍 保育者の学び

### 1. 問題と目的

新型コロナウイルス感染拡大防止のため、保育者の心身の健康管理についての負担が増大している。東京大学大学院教育学研究科附属発達保育実践政策学センター（2020）やこども環境学会（2020）の調査によると、職員が新型コロナに関連する業務に対して負担だと思える割合は、半数を超えている。園内の感染拡大防止のため、保育者自身が三密を避けるために様々なことを制限したり、新しい実践や環境整備をしたりする必要性がでていくことがうかがわれる。コロナ禍における感染予防を考慮した子どもや保護者に対する実践や環境整備は、文部科学省学校の事例集（2020）に掲載されている。

コロナ禍で行われた中央教育審議会（2021）の答申には、幼児教育の質向上について以下のような記載がある。「(2) 幼児教育の内容・方法の改善充実」の中の③教育環境の整備について、「幼児期は直接的・具体的な体験が重要であることを踏まえ、ICT 等の特性や使用方法等を考慮した上で、幼児の直接的・具体的な体験を更に豊かにするための工夫をしながら活用するとともに、幼児教育施設における業務の ICT 化の推進等により、教職員の事務負担の軽減を図ることが重要である」。また、「(7) 新型コロナウイルス感染症への対応」については、「新型コロナウイルス感染症への対応をとりつつ、子どもの健やかな育ちを守り支えていくため、幼稚園等において、保健・福祉等の専門職や関係機関等とスムーズに連携できるよう、地方公共団体における幼児教育推進体制の整備、研修の充実等による資質等の向上を図るとともに、トイレや空調設備の改修等による衛生環境の改善等の感染防止に向けた取組の推進や園務改善のための ICT 化の支援など教職員の勤務環境の整備などを進めていくことが必要である」とされており、園における ICT の環境整備と ICT を取り入れた業務も 1 つの視点となっている。特に、保育者の質を向上するために必要となる研修会について、保育者が集まり学びを深める機会を感染予防しつつ確保する必要性がある。文部科学省は、「対面式免許状更新講習の実施方法の変更に関する手続きの特例について」（2020）を出し、テレビ会議システムを用いた同時双方向型の遠隔授業による講習をその 1 つに例示している。都道府県単位では、大畑（2020）の報告する北海道幼児教育センターが多くのオンデマンド教材を配信している。この方法により、研修に参加する上での時間の短縮や旅費の削

## 保育者向け双方向型オンライン研修の実践報告と課題

減が述べられている。しかし、他園との情報共有ができないこと、講師と参加者との質疑ができないことの問題点を挙げており、遠隔システムを用いた双方向型の研修の必要性を述べている。

文部科学省（2020）の示す「新型コロナウイルス感染症への対応のための幼稚園等の取組事例集」では、自園の保育のあり方を見直したり、保育力を高める取組として、テレビ会議システムを用いた園内の保育者との双方向での情報共有の実践が報告されている。しかし、テレビ会議システムを用いた研修会については、まだ実践がなされていない。研究においても海外の研究では Barnes, J. K., Guin, A., & Allen, K. (2018) によるオンライン研修受講者へのインタビュー調査があるが、日本における報告ない。Barnes, J. K., Guin, A., & Allen, K. (2018) のインタビュー結果から、研修内容については、オンライン研修を企画する参加者が求める内容をうまく盛り込んだ研修をデザインすることが高評価に繋がること示されている。また、参加者にフィードバックする機会を提供するために、非同期と同期を混ぜた形でオンライン研修を企画することが有益であるとしている。コロナ禍において、幼児教育の質を向上させる方策として、非同期のオンデマンド配信による一方向の研修会ではなく、同期型の双方向での研修の場も作っていくことが、今後必要になることが考えられる。

本研究では、双方向型オンライン研修会という言葉を用いる。この言葉の定義は「ICT を用いて対面ではないオンラインでの状況下で、テレビ会議システムといったシステムやアプリを用いて、教授者と参加者、また参加者同士が双方向で情報のやり取りを行う研修会」と操作的に定義する。

本研究では、園がライブ配信する保育者向け双方向型オンライン研修会の調査を行い、その有効性と課題について報告する。

## 2. 方法

本研究の有効性と課題について、Google Forms により参加者に事後アンケート入力を依頼した。また個別に視聴状況について、メールや電話で聞き取りを行った(表 1)。記述統計については、1・2・3 回目全てを集計した。自由記述については、1 回目、2 回目それぞれの記述を切片化して、他の法人が実施した双方向型のオンライン研修会参加経験のある保育者 3 名と保育者養成校指導経験のある筆者により、有効性と課題のカテゴリー化を行った。なお、3 回目のみ Google Jamboard について自由記述を求め、学びになったことと難しかったことを同じ方法でカテゴリー化した。

研修内容は、子どもの科学する心について読み取る方法を講演と実践発表で行った。その後、参加者同士のグループワークで科学する心の読み取りについて意見交換を行った。

参加者は、実践園と過去に合同で研修を行った園が、ソニー教育財団や講師からの呼びかけで集まった。研修の流れは表 2 に示すとおりである。

表 1 参加者の属性と参加状態

役職について	1回目	2回目	3回目
未満児担当	6 13.3%	1 2.9%	10 25.0%
幼児担当	13 28.9%	14 40.0%	14 35.0%
フリーの保育者	1 2.2%	1 2.9%	1 2.5%
学年・役職リーダー	1 2.2%	3 8.6%	3 7.5%
主任・主幹保育者	4 8.9%	6 17.1%	2 5.0%
副園長	2 4.4%	0 0.0%	0 0.0%
園長・施設長	11 24.4%	5 14.3%	3 7.5%
理事長・会社代表者	3 6.7%	0 0.0%	3 7.5%
保育者養成校教員	3 6.7%	3 8.6%	3 7.5%
行政職員	1 2.2%	3 8.6%	1 2.5%
研修会にはどのようなものを使って参加しましたか?	1回目	2回目	3回目
お勤め先のパソコンを使って参加した。	25 55.6%	27 77.1%	22 55.0%
お勤め先のタブレットやスマートフォン等を使って参加した。	4 8.9%	2 5.7%	15 37.0%
自宅のパソコンを使って参加した。	5 11.1%	2 5.7%	2 5.0%
自宅のタブレットやスマートフォン等を使って参加した。	10 22.2%	3 8.6%	1 2.5%
職場で自分のパソコンを使って参加した。	1 2.2%	1 2.9%	0 0.0%
1つ画面で同時に何名参加されましたか?	1回目	2回目	3回目
1人	34 75.6%	27 77.1%	30 75.0%
2人以上	11 24.4%	8 22.9%	10 25.0%
Zoomを利用したことはありますか?	1回目	2回目	3回目
はい	30 66.7%	25 71.4%	37 92.5%
いいえ	15 33.3%	10 28.6%	3 7.5%
Zoomにスムーズに参加することができましたか?	1回目	2回目	3回目
はい	41 91.1%	33 94.3%	39 97.5%
いいえ	4 8.9%	2 5.7%	1 2.5%
Zoomの回線が切れたり、画像や音声の乱れはありましたか?	1回目	2回目	3回目
切れたり、乱れることはなかった。	35 77.8%	30 85.7%	24 60.0%
途中画像が乱れることがあった。	1 2.2%	0 0.0%	4 10.0%
途中音声途切れることがあった。	6 13.3%	5 14.3%	11 27.5%
途中から全く参加できなくなった。	3 6.7%	0 0.0%	1 2.5%

※数字は人数を示す

本実践のテレビ会議システムは、Zoom を用いた。グループワークは、主催園で参加者をブレイクアウトルームで振り分けて行った(写真 1)。なお、実践の 3 回目のみ、ブレイクアウトルームによるグループワーク中に、Google Jamboard というホワイトボード上の画面に、付箋や写真を添付するアプリを用いた(写真 2)。

なお、倫理的配慮として、この回答者に対する事後アンケート結果は匿名にして、今後の実践や学会発表で用いることに理解を得た上でやっている。

表 2 オンライン研修会の実施内容

日時 全員参加時間帯	概要説明	実践事例 発表	講演	グループワーク	グループワーク の報告	まとめ	今回の運営方法説明と コロナ対策の保育について
1回目 60分間 2020/5/28 13時~14時	5分	×	25分	20分 約3~4人	×	10分	50分(任意参加) 15時終了
2回目 95分間 2020/7/22 14時30分 ~16時5分(5分延長)	5分	15分	45分	20分 約4~5人	×	10分	45分(任意参加) 17時終了
2回目 95分間 2020/12/22 13時00分 ~14時30分	5分	×	30分	30分 約4~5人	10分	10分	45分(任意参加) 15時30分終了



写真1 オンライン研修のホスト側の様子



写真2 Google Jamboardでのグループワークで作成したシート

### 3. 結果と考察

第1回目は、72名（16都道府県）の参加者の内45名の回答、第2回目は、62名（13都道府県）の参加者の内35名の回答、3回目は54名（12都道府県）の参加者の内40名の回答を得た。参加者の属性と参加状態を表1に示した。

「役職について」と質問したところ、幼児担当者がどの実施日でも多かった。また、2回目のみ未満児担当者の参加が少なかった。2回目については、未満児の午睡後の時間であったため、未満児担当者の参加が少なかったことがうかがわれる。

「研修会にはどのようなものを使って参加しましたか?」と質問したところ、いずれの回においても、勤め先のパソコンを使って参加した割合が高かった。一方で、2回目、3回目と違い、第1回目は緊急事態宣言解除直後であったため、自宅からパソコン、スマートフォン、タブレットを使って参加している方が多い結果となった。コロナ禍で出勤できない場合や対面での実施ができない場合において、オンライン研修に対する参加しやすさはあったと考えられる。

「1つの画面で同時に何名参加されましたか?」と質問したところ、約20%以上の方々が1画面を複数人で視聴していた。研修会実施前の園の状況に応じて、参加人数を調整できることが、この研修会の有効性になると考えられる。

「Zoomを利用したことはありますか?」と質問したところ、1回目の66.7%を起点に2回目、3回目と上昇していた。「Zoomにスムーズに参加することができましたか?」と質問したところ、各回90%はスムーズに参加できている結果であった。Zoomによる双方向の研修を連続して行ったところ、コロナ禍におけるZoomの認知度が高まり、スムーズに参加できたことがうかがわれる。

「Zoomの回線が切れたり、画像や音声の乱れはありましたか?」と質問したところ、いずれも60%以上の方は支障がなかった。一方で、「途中で全く参加できなくなった」については、1回目が約7%、3回目が約3%となり、「途中音声が途切れることがあった」については、1回目が約13%、2回目が約14%、3回目が約27%と回答があった。これは、参加園におけるWiFi環境や、3回目に実施したGoogle JamboardをZoomと同時に起動したことで、データダイエットが出来なかったためと考えられる。今後、双方向のオンライン研修を実施する上で、WiFi環境の整備やデータダイエットの仕方については課題になると考えられる。

参加しやすい研修時間と方法についての回答を整理したものを表3に示した。全体として、研修時間は1~2時間が適当であると考えられていた。また、講演だけでなく、グループワーク等を取り入れ、

参加者がお互いに話し合う機会を設けることがよいという回答が多かった。講演で聞いた内容を教授者や参加者と語り合うグループワークは、保育者にとって参加しやすいと受け止められていた。しかし、講演会のみという回答も一定数あった。このことから、研修を企画する際、講演会のみ企画と講演会とグループワークの企画の両方を視野に入れる必要があると考えられる。保育者の労務の都合を考えると、講演についてはオンデマンドで一方向的に配信し、聞きたい時間に聞けるようにする。そして講演に対する質疑は双方向で行い、教授者と保育者共に語り合える場を確保することも今後の双方向の研修方法と考えられる。

表3 参加しやすい研修時間と方法

今後オンライン研修会を企画するとしたら どのような時間が良いですか？(複数回答可)	1回目	2回目	3回目
講演会のみ1時間程度	16	12	6
講演会のみ2時間程度(休憩有)	11	7	5
講演会のみ3時間程度(休憩有)	1	0	0
グループワークのみ1時間程度	6	5	3
グループワークのみ2時間程度(休憩有)	1	1	6
講演会とグループワーク1時間程度	23	3	9
講演会とグループワーク2時間程度(途中休憩有)	26	25	23
講演会とグループワーク3時間程度(途中休憩有)	1	3	5

※数字は人数を示す

1回目、2回目の参加者の自由記述からカテゴリー分けを行った。双方向のオンライン研修に関する有効性と課題は、表4に示すとおりであった。有効性として『気軽な参加』、『他園との交流』、『テレビ会議システムの良さ』、『オンライン研修での学び』が挙げられた。また、課題について『テレビ会議システムの操作方法と問題』、『グループワークの進行の課題』、『電波問題』、『音声状況の悪さ』、『グループワークの問題』、『オンライン研修のしんどさ』が挙げられた。

有効性については、『気軽な参加』の記述が最も多く、「1つの研修を複数人の職員が受講させてもらえることも良い点だと思います」、「会場までの移動時間がなく、もし子どもに何かあったら駆けつけることもできたので、Zoomでの研修はよかったです」といった記述がみられた。コロナ禍において、時間、感染防止の観点から移動や距離を気にすることなく、また園の状況によっては複数人同時に参加できることや、突発的な園内トラブルも対処できることが、有効性として受け止められていたことがうかがわれる。

『他園との交流』の記述については、「たくさんの園が参加できたことで、日常では会うことが無い地域の先生方と意見交換ができたので良かったです」、「全国津々浦々、いろいろな場所や経歴の方と一緒に研修へ参加できること」といった記述がみられた。感染を気にすることなく参加でき、都道府県をまたぐ形で、多様な保育者がオンライン研修会に参加できたことによる意見と考えられる。

『テレビ会議システムの良さ』に関する記述については、「遠く離れている園の方、講師の先生のお話を自分の園にしながら、聞くことができ、このような大変な状況の中でも、保育の研究会に参加できたことが良かったです」、

※数字は人数を示す

「いろんな先生一人ひとりの表情を見ることができ、パワーポイントも一人で見られるため見やすい」といった記述がみられた。双方向のオンライン上で講師を身近に感じること、資料の明瞭さや話しやすさ、他の保育者と双方向でグループワークなども行えたことにより、このように記述されたと考えられる。

## 保育者向け双方向型オンライン研修の実践報告と課題

『オンライン研修での学び』に関する記述については、「子どもの遊びを見る視点を学ぶことが出来たことです」、「発表中のチャットにより、発表に新たな気づきが生じたこと」といった記述がみられた。対面ではない方法でも十分な研修の学びが得られていた。

以上のように、様々な有効性に関する記述がみられた。秋田ら（2019）は保育におけるデジタルメディアに関連した研究をレビューしているが、2000年以降情報機器の基本的な操作能力が保育者養成校の学生に求められ、2011年以降にはポータブル端末の広がりによって操作能力については問題にならなくなってきたと述べている。また小泉（2019）の調査においても、スマートデバイスを用いて保育者と保護者とのコミュニケーションを円滑にする実践が報告されており、園の業務でもポータブル端末やスマートデバイスといったICT機器の理解が進んでいることから、オンラインの研修に対しても参加しやすさやテレビ会議システムへの理解に繋がっていると考えられる。

一方、課題として『テレビ会議システムの操作方法の問題』については、「初めての試みだったので、始めは操作方法が分からず戸惑った」、「グループワーク後の待機の際に、終わったと勘違いして1回ログアウトしてしまった」といった記述がみられた。Zoomの操作方法について、研修前の入室及び研修会中の操作において、初めての方には難しい場面があったと考えられる。

『グループワークの進行の課題』については、「グループワークでの時間配分をするファシリテーターの存在が必要であり、進行次第で全ての事例を伺うことが出来ない」、「グループ別協議は全てにおいて該当するが、発言者が限定される傾向にあったこと」という記述があった。司会者にもよると思われるが、グループワークにおける進行方法や話し始めるきっかけ等の難しさを感じたようであった。

『電波問題』については、「電波状況による音声と画像の問題」、「園内で複数人パソコンを使っており、WiFiを使っても電波が弱く、準備に少し時間がかかってしまった」といった記述がみられた。表1に示したように、「途中のZoomの乱れや切れること」が約20%あったという実態が挙げられている。自由記述によると、1台の出力の弱いWiFi機器に複数台のパソコンで無線による接続を行ったことで、グループワークの時に回線が切れる事象が報告されていた。参加者には不要な時にはカメラやマイクをOFFにするデータダイエットについて周知することが必要であると考えられる。

『音声状況の悪さ』については、「グループワークの際に、同じフロアで会議されている方がいて、他のグループの方々の声が入ってきてすごく聞きづらかった」、「参加者のミュートし忘れ」といった記述がみられた。Zoom開始時早々に参加者にマイクOFFを促さなかったことや、グループワーク中に参加者以外の声等を拾うことによって、起きた問題と考えられる。

『グループワークの時間の問題』については、「時間がきっちり決められているので、グループワークの時間が短く4人で回すのが難しかった」、「もう少しグループワークの時間があっても良かった」といった記述がみられた。2回目のグループワーク中の1グループの人数が4~5名と1回目よりも多く、1人の話す時間が短かったことが理由と考えられる。

『オンライン研修のしんどさ』については、「直接お話するよりも緊張しました。画面を見ての研修会だったからか、終わった後の疲れをすごく感じました」といった記述がみられた。オンライン研修に慣れないことや、対面と違い話している人と距離感があること、また、2回目や3回目の研修会全体の時間が長いことが起因していると考えられる。

表 4 オンライン研修会の意義課題の自由記述

カテゴリー		1 回目	2 回目
有効性	気軽な参加	16	10
	他園との交流	12	13
	テレビ会議システムの良さ	13	8
	オンライン研修会での学び	5	7
課題	テレビ会議システムの操作方法の問題	10	6
	グループワークの進行の課題	5	6
	電波問題	5	2
	音声状況の悪さ	7	—
	グループワークの時間の問題	—	4
	オンライン研修のしんどさ	—	4

次に 3 回目に行った Google Jamboard を用いたグループワークで学びになったことと難しかったことの自由記述について、質問したことについて、カテゴリー分けを行った。その結果、学びになったこととして、『実践の深まり』、『操作からの学び』、『保育者の質向上』、『他園の実践』の 4 つのカテゴリーが挙げられ、難しかったこととして『操作の難しさ』、『電波問題』、『事前準備』、『グループワークの時間の問題』の 4 つのカテゴリーが挙げられた (表 5)。

学びになったこととして、『実践の深まり』については、「写真について、様々な視点の意見を聞くことができた」、「年齢によって様々な科学する心があることを知れた」といった記述があった。オンライン上で違う立場の保育者から意見をもらったこと、自分自身が講演会で得た視点について整理ができたという意見があった。

表 5 Google Jamboard の意義課題の自由記述

カテゴリー		
つ 学 た び こ に と な	実践の深まり	14
	操作からの学び	11
	保育者の質向上	6
	他園の実践	5
難 た し こ か と っ	操作の難しさ	22
	電波問題	7
	事前準備	4
	グループワークの時間の問題	2

※数字は人数を示す

『操作からの学び』については、「初めて使用したので使い方がわからず、時間をとられたが、慣れてくると機能的には画期的だと思った」、「皆で動かせるホワイトボード、また、きれいにかける付箋機能は便利だと思いました」といった記述があった。対面型の研修に近い研修が出来たことや、付箋が誰の意見のものなのかが分かり、お互いの情報共有が円滑にできたことが学びになったという意見があった。

『保育者の質向上』については、「保育をしていく中で、子どもの小さな発見や興味から、様々な保育に繋げていく先生方が多く、またそこに繋げていく過程も勉強になった」、「同じ写真でも他者から見る

## 保育者向け双方向型オンライン研修の実践報告と課題

と別の気づきがあり、他者から写真と事例に対する意見を頂けたことで自園の保育の良さを再発見することが出来ました」といった記述があった。共有した写真に対して、それぞれの保育者の気づきを付箋で貼ることで共に意見交換ができ、他者と共感したり、意見をもらったりできたことや、自分自身の保育の良さを再発見することができたと考えられる。

『他園の実践』については、「他園の保育をしている写真を見ることができてよかった」、「各園のヒラメキやトキメキの視点を詳しく知る事ができた」といった他園の実践事例や写真を見聞きすることが学びになったという意見があった。感染防止のため、他園の実践を見る機会が少なくなっているが、保育者の学びとして、オンライン上で実践事例を見ることは有効であると考えられる。

次に、難しかったことについて、『操作の難しさ』については、「操作に必死で言葉でのグループワークがあまりできていなかったように思います。事前にある程度作ることができていれば発表もスムーズにできたと感じました。また、そこにいただいた意見をつけ足していくことで内容を深めていけたと思います」、「グループワークをしながらのコメント（付箋）が難しかった」といった記述があった。初めて使う人が多いことによる操作の難しさと、Zoomでの会話と付箋を貼る作業を同時に行うことの難しさが挙げられた。

『電波問題』については、「回線が悪く、画像の読み込みに時間がかかったこと、初めて利用したので操作に時間がかかった」、「Jamboard が重くて落ちてしまう方が多かったので、ズームで写真を見せ合いながら取り組みました」といった記述があった。ZoomとGoogle Jamboardに保育実践写真を掲載することによるデータ量の多さのため、回線が非常に重たくなり、操作がしにくくなったことが挙げられた。

『事前準備』については、「グループに1人、進行確認の役目を担う人がいると良い気がしました」、「Zoomの使い方について予習をしたが、実際に参加してみると戸惑うことがあった」といった記述があった。オンライン上での付箋を用いたグループワークを行う上で、話を始める人の選出や事前に発表する写真や付箋などを貼る等、事前準備が必要であることが挙げられた。

『グループワークの時間の問題』については、「時間が短かった」、「画像の読み込みに時間がかかったことと、初めて利用したので操作に時間がかかった」といった記述があった。操作に慣れる時間が必要となり、グループワークを行うために必要な時間が足りなかったことが挙げられた。

Zoomの話し合いだけでなく、こういった違うアプリケーションを併用して使うことで、より保育実践と保育者の意見の可視化が行われて、学びが深まったと考えられる。特に、話し合いだけでは、どのような意見が出たのかは、当事者だけしか理解が深まらないが、このようなアプリケーションが保存され、参加者それぞれが研修会后見直すことにより、自園の保育実践に生かせることが期待される。中原（2014）は「研修転移」という概念を述べているが、研修には、研修を受けたことにより保育者自身の保育がより良くなることが求められる。大豆生田（2020）は、研修転移を促す研修方法として往還型研修を提案している。この研修は、「外部研修で受けた内容を保育現場で実践し、それをまた次の研修で持ち寄って研修を行うという研修方法である。外部研修と現場の取り組みの往還を繰り返す中で、保育の質向上を実現しようとする研修スタイルである」と述べている。コロナ禍において、対面での往還型研修の実施は難しくなる。しかし、双方向型オンライン研修を複数回行い、1園から複数人が同じ内容を聴講することで、研修内容を保育者が共有することができ、共有することで、園内で一般化しやすい保育実践のアイデアが生まれ、保育の質向上に繋がることが期待される。そのためには、こういったZoomといったテレビ会議アプリケーションと、Google Jamboardといった保育実践の写真や意見を付箋で共有できるアプリケーションを併用することで、オンライン上で往還型研修の実践が広がるのが推察される。



文部科学省が全国の大学で調査を行った、遠隔授業の質の確保のために留意している事項については、「双方向性を確保」、「円滑な授業進行を確保」、「学生の意見を反映」、「対面の機会も確保」の順位が高く、「双方向性を確保」については、約 9 割の大学の留意事項として挙げられている。また、「円滑な授業進行を確保」が 7 割であった。本研究における有効性については、双方向型の研修であったことからの評価であり、課題点についてはオンライン研修運営側が円滑な運営方法を支援していくことで解決できると考えられる。

よりよい運営のためには、オンライン研修運営側が事前に、話しやすいグループ分け、グループ分けした際の司会者の設定、司会者のオンライン上でのファシリテートする手法の提案等を準備することが望ましい。また、参加者は、事前のアプリケーションの操作方法の習熟、オンライン上での話し合いの方法に慣れること、各園のパソコンなどの接続状態において、電波問題、複数人が ICT を使う環境などの問題を解消して、ICT を用いた研修に園全体がソフト面で慣れ、ハード面で整備されていくことが望まれる。保育者養成の段階でも、文部科学省が示した教職課程コアカリキュラム (2017) において、「保育内容の指導方法と保育の構想」における到達目標に「各領域の特性や幼児の体験との関連を考慮した情報機器及び教材の活用法を理解し、保育の構想に活用することができる」と既に述べられている。そこで、保育者養成の段階で研修利用の方法についても学ぶ機会があると、現場に出た時に抵抗なく利用できることに繋がることを期待される。

双方向型のオンライン研修会は、対面ではない方法として遠方からの参加のしやすさが有効性として認められるが、その実施前の事前操作方法や運営方法について課題があり、参加者に事前に通知して改善を図ることが求められる。

#### 4. 引用文献

- 1) 秋田喜代美・野澤祥子・堀田由加里・若林陽子 (2019) 保育におけるデジタルメディアに関する研究の展望. 東京大学大学院教育学研究科紀要. (59). pp.347-372.
- 2) Barnes, J. K., Guin, A., & Allen, K. (2018) Training needs and online learning preferences of early childhood professionals Journal of Early Childhood Teacher Education. (39). 2. pp.114-130.
- 3) こども環境学会 (2020) コロナ禍状況の保育所・幼稚園・認定こども園における休園・登園自粛への対応とこどもたちへの影響に関する調査-中間報告.  
(2021 年 2 月 15 日確認)
- 4) 小泉裕子 (2019) 保育現場における ICT 化の有効性について：スマートデバイスを活用した保育園における導入効果. 鎌倉女子大学紀要. (26). pp.1-14.
- 5) 文部科学省 (2017) 教職課程コアカリキュラム.  
(2021 年 2 月 15 日確認)
- 6) 文部科学省 (2020a) 新型コロナウイルス感染症への対応に関する免許状更新講習の実施方法の特例等の延長及び拡充について (通知).  
(2021 年 2 月 15 日確認)
- 7) 文部科学省 (2020b) 大学における後期等の授業の実施方針等に関する調査結果.  
(2021 年 2 月 15 日確認)
- 8) 中原淳 (2014) 研修開発入門—会社で「教える」、競争優位を「つくる」—. ダイヤモンド社.
- 9) 大畑明美 (2020) コロナ禍における幼児教育推進センターの取組について. 文部科学省. 令和 2 年度幼稚園教育理解推進事業 中央協議会 資料. pp.71-89.

## 保育者向け双方向型オンライン研修の実践報告と課題

- 10) 大豆生田啓友 (2020) 保育の質向上と外部研修のあり方ーキャリアアップ研修における往還型研修の意義を通してー. 小児保健研究. (79). 2. pp.99-103.
- 11) 中央教育審議会 (2021) 「令和の日本型学校教育」の構築を目指して～全ての子供たちの可能性を引き出す, 個別最適な学びと, 協働的な学びの実現～ (答申). (2021年2月15日確認)

### 謝辞

本実践はソニー教育財団の助成を受け、大阪総合保育大学の瀧川教授、津田このみ学園の先生方の御助力を得た。また、実施運営にあたり社会福祉法人檸檬会青木副理事長先生の助言を頂いた。ここに謝意を申し上げる。

### 付記

本論文は日本乳幼児教育学会第30回大会で発表したものを加筆修正したものである。